

米国民を襲った借金のワナ

アメリカ家計の借金の時代推移から何を学ぶか！？

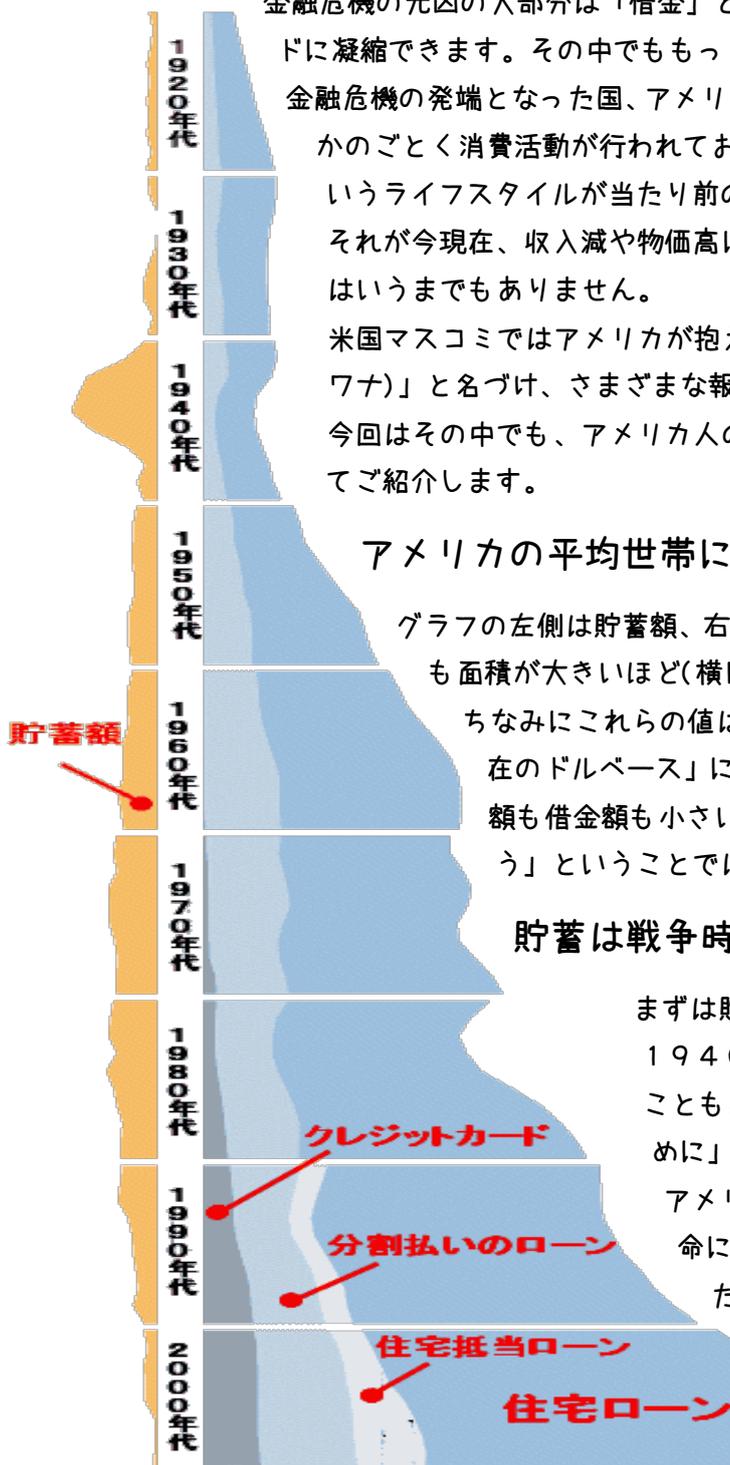
サブプライムローンなどの金融派生商品、そしてクレジットカードなど、現在の金融危機の元凶の大部分は「借金」と「レバレッジ」、そして「金融工学」のキーワードに凝縮できます。その中でももっとも深刻なのが「借金」です。

金融危機の発端となった国、アメリカでは大量消費が国民のDNAに刷り込まれているかのごとく消費活動が行われており、「足りないお金は借金をして手に入れる」というライフスタイルが当たり前のものとなっていました。

それが今現在、収入減や物価高により、多くの人の頭痛のタネとなっていることはいうまでもありません。

米国マスコミではアメリカが抱えるこの「借金問題」を「The Debt Trap(借金のワナ)」と名づけ、さまざまな報道が行われています。

今回はその中でも、アメリカ人の平均的な家庭が抱える借金の年代別推移についてご紹介します。



アメリカの平均世帯における借金の推移

グラフの左側は貯蓄額、右側は各種系統別の借金額を示し、もちろん両方も面積が大きいほど(横に長いほど)額も巨大なものとなります。

ちなみにこれらの値は、当時の額をそのまま表したわけではなく「現在のドルベース」に換算されています。だから「1920年代の貯蓄額も借金額も小さいけど、これは当時の額(物価)のままだからだろう」ということではありません。

貯蓄は戦争時代が最多に

まずは貯蓄額から見ていくことにします。

1940年代に急増していますが、これは戦争中ということもあり人々が消費をひかえて「何かあった時のために」と貯蓄をしていたからでしょう。

アメリカにおいても有事には「貯蓄を懸命に行う」という傾向が見られたわけですが、データが

掲載されている1920年代以降において、唯一、貯蓄が借金を上回った時代です。皮肉なこと

に、家計が一番安定していた時代ともいえます。

ちなみに一番多かったのは1944年で1万2807ドル。戦争が終わってからは安心感から一挙に貯蓄が解かれ、その後少しずつまた増加する傾向を見せています。

しかし1970年～1980年を境に少しずつ貯蓄傾向は減少し、2000年代に入るとほとんどゼロに等しくなります。

ほぼ同時期に「クレジットカード」の普及・浸透が進んでおり、これがアメリカの貯蓄傾向を奪った要因と考えられます。



増えるばかりの借金・・・1980年代まで

一方借金については、図を見れば一目瞭然です。1950年以降にダイナミックな増加を見せています。

1950年代～1960年代はごく普通の分割ローンが増え、以後その額はほぼ横ばいを続けています。

住宅ローンは1950年以降に急増し、1970年代にほぼ横ばいとなります

ますが、1980年以降再び増加を見せています。

これについては、返済の見込みが危ないと思われるリスクが高い人にも貸し出しをする傾向が増加したからです。貸し手はリスクを分散化するため、サブプライムローンとして証券化を行い、投資家にそれらを売却したわけです。

言い換えれば、「住宅ローンの貸し手がもっと儲けたいから、返済できない可能性の高い人にも貸すようになった」というわけです。

でも損害を被るのは勘弁こうむりたいので、考えられる損失を切り売りし、リスクを他人に丸投げしたということになります。また、これを助長するために、税制が改正されたのも一因です。



雪だるま状態・・・1990年代以降

1990年代以降になると借金の額は加速度的に大きくなります。要素は大きわけて3つあります。



1. クレジットカードの普及と拡大

1980年代から普及し始めたクレジットカードは、特に低所得者層に打ち出の小づち状態な魔法のカードとして浸透し、利用額も増えていきます。

2. 住宅抵当ローン

住宅価格の高騰を前提に、購入した住宅(完済していないも含む)を担保にして差額を借り入れ、生活に充当するライフスタイルが広まっていきます。

3. 住宅ローン

低所得者層によるローンを組み

込んだ住宅購入が加

速化し、例の「サブプライムローン」が大活躍しました。

しかし、ふくらんだ風船はいつかははじけるものです。



崩壊が始まった2000年代

2000年代になると各種借金の前提が崩れ(臨界点を突破し)、借金生活をしてきた人たちに重圧がのしかかるようになります。

持ち家比率は70%ほどに上昇し、わずか31%の家主のみが住宅ローンを完済している状態です。

大学生のカード利用率は3人に2人、一世帯あたりのカード枚数は13枚に達しました。

また、分割ローンにおいては1990年代は50%台だった大学生のカードローン利用者が2000年代には65%にまで上昇し、クレジットカードの未払い額のある家庭は1970年代は6%だったものが40%にまで達しました。

平均借金額は2007年に12万1650ドルに達し、その翌年には11万7951ドルとやや減少しています。

これは、主に住宅抵当ローンと住宅ローンの「整理」によるものと思われます。

実際グラフを良く見ると、2007年~2008年の間ではこれら2つの借金は減っているものの、クレジットカードや分割ローンの額は横ばい、あるいは増加の傾向が確認できます。

クレジットカードの登場が貯蓄の減少を加速

貯蓄による消費の順番は、まず貯めて、そして消費します。

一方でカードは、まず消費し、そしてその分を返済します。

原則的には購入予定のものに対して「先に払うか、後に払うか」の違いでしかありません。どれだけ先に欲しいものを早く手に入れられるかを考えれば、先に手元に届くクレジットカードを使った方が良いと考えるのは理にかなったものです。

しかしこの仕組みは同時に「将来収穫するものを先行して手に入れ、後で労力をかけてその埋め合わせをする」という考え方をアメリカに浸透させてしまった可能性があります。

住宅ローンや住宅抵当ローンも突き詰めれば、クレジットカードの考えの延長に過ぎません。



「ドラえもん」の秘密道具の一つに「未来小切手帳」というものがあります。

これは小切手の口座を開いていなくとも誰でも自由に小切手を切れ、オールマイティに使えるという便利なもの。

ただし、使った額は強制的に利用者が今後手に入れる収入から自動的に返却させられる仕組みとなっています。要はサイン主が将来入手する予定の現金を現在使っているだけに過ぎないのですが、この仕組みを理解できなかった主人公ののび太は、調子によって小切手を切りまくったために数十年先までの収入を先行して使い込んでしまう羽目になりました。

クレジットカードや住宅ローン(サブプライムローン)、住宅抵当ローンも、アメリカの人たちにとってはこの「未来小切手帳」のようなもので、しかもその仕組みをあまり理解していなかっただけ、という話なのかもしれません。

私たちはアメリカ国民の経験から学んで、正しい住宅ローンや借金の知識を身につけましょう。

記念日の食

記念日とは「何らかの物事や過去の出来事を記念する日」です。

公的なものと私的なものがあり、公的な記念日としては「行事」があり、私的な記念日の代表として誕生日や結婚記念日などがあります。ここでは、行事以外で、食べ物に関する記念日を取り上げていきます。

日付の数字の語呂合わせから設定されたものが多いのですが、旬や体調などの季節や、由来や発見などの誕生とも結びついたものも多くあります。記念日に設定された「食べ物」を日常生活に取り入れ、

その食べ物をより身近に考えるキッカケにしていきましょう。

2月8日 初午はつうま

立春を迎える2月は、暦の上では春の訪れを告げる月です。

日が一日一日長くなりますが、実は一年で一番気温が低い寒い時期でもあります。

暖かい南風の「春一番」が吹く一方、低気圧の通過で思わぬ大雪が降ることもあり、寒暖の差の激しい月です。

農事が始まる月には、土から生まれたものをたくさん取り、体調に気をつけましょう。

不足しがちなたんぱく質やビタミンを補給する

小豆飯

小豆の主成分は糖質とたんぱく質で、ビタミンB1や食物繊維が多く含まれています。このことから、かつては定期的に小豆飯を食べることで不足しがちなたんぱく質やビタミン類を補い、体調を整える食習慣がありました。

小豆と米は一緒に取ることで双方に不足している必須アミノ酸を補うことになり、アミノ酸スコアが満点になる食べ合わせになります。



●材料（2人分）

小豆 14g（目安は米の1.5割） 米 1カップ（140g）
付け合せ（切り昆布など）

●作り方

- ① 小豆はひと煮立ちさせ、汁気をきる。
- ② 米は研ぎ、分量の水加減にする。
- ③ 米と小豆を軽く混ぜ合わせ、炊く。
- ④ 器に盛り、切り昆布を添える。